室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

パキスタンにおける一帯一路構想の進行状況－現地調査を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清末, 愛砂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009831

パキスタンにおける一帯一路構想の進行状況－現地調査を通して

清末 愛砂

1. はじめに

本報告の目的は、パキスタンでの二度にわたる現地調査を通して見えてきた「パキスタン・中国の経済回廊」(China-Pakistan Economic Corridor/CPEC)（以下、「CPEC」という。）の進行状況を紹介することにある。

現地調査は、2017年2月25日から3月4日にかけて、および同年9月21日から30日にかけて実施した（日本からの移動日を除く）。現地調査を実施するにあたり、先に2016年の本科研の研究会（2016年6月11日、室蘭工業大学）で調査計画の概要を報告するとともに、現地での聞き取り調査時の留意点、とりわけ CPEC 関連プロジェクトの工事現場の訪問許可の取得問題やパキスタン軍の警備下にある工事現場での撮影問題等の打開策を出席者と相談した。また、各現地調査終了後に本科研の研究会（2017年12月23日於新潟県立大学）でその報告を行った。

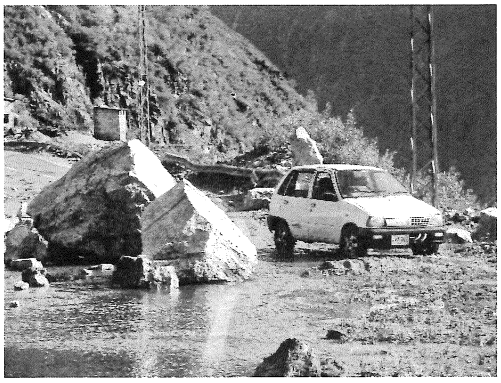
第一次現地調査は、主にはイスラマバード（中国企業の事務所への訪問、中国との取引を行うパキスタン人貿易商、国立現代語大学（National University of Modern Languages）内に開設されている孔子学院や同大学の中国語学科、孔子学院で学ぶ学生の自宅、中国製品を販売するスーパー・マーケット、駐在している中国人が利用する大型ショッピング・モール、国際イスラーム大学イスラマバード校 (International Islamic University, Islamabad)、CPEC に詳しいパキスタン人研究者等)、カラコルム・ハイウェイ（詳細は後述の通り）の近くで実施されている中国企業による道路工事の現場等を訪問し、可能な限り聞き取りを行った。また、イスラマバードで開催された CPEC 関連の国際セミナー“Changing Regional Scenario and China-Pakistan Economic Corridor”にも出席し、CPEC をめぐるパキスタン内での評価や課題および今後の動向等に関する見識を得た。

第二次現地調査は、カラチからハイウェイ（幹線道)、モーターウェイ（日本の高速道路に相当)、カラコルム・ハイウェイ等を利用しながら北上する形で実施した。そのなかで、CPEC 関連プロジェクトを進めているパキスタン企業とその工事現場（風力発電所）での聞き取り（中国人技術者への聞き取りを含む)、中国人の民間コンサルタントや CPEC に詳しいパキスタン人研究者からの聞き取りをしたほか、カラコルム・ハイウェイ沿いの中国企業の工事風景等を目視した。なお、二回目の現地調査では当初、中国が2002年から重点的に整備にかかわり、CPEC の下でパキスタンから租借権を取得したグワーダル港（バローチスターン州）の訪問を予定していた。しかし、訪問先の調整を担ってくれたパキスタン人コーディネーターのワジッド・アリ氏が、訪問許可を取得するために各関係者に打診してくれたものの、結果的に許可を得ることができず、断念せざるをえなかった。

2. 中国とパキスタンの親密な関係－対インド戦略と経済的利害

国境を接しているパキスタンと中国は、歴史的に緊密な友好関係を構築してきた。例えば、中国はパキスタンに対し、経済援助や技術移転および武器の供与を行うことで、積極的に親パキスタン政策を繰り返してきた。その理由は、両国の間に対インドという共通課題が存在するからである。パキスタンは1947年の分離独立時の抗争およびその後のカシュミールの帰属をめぐるインドとの長年の紛争により、中国の後ろ盾を軍事的にも政治的にも必要としてきた。一方、中国はアジアの大国のひとつであるインドへのけん制を政治的に求めてきた。こうした背景を受け、1950 年代後半から両国の接近がはじまり、その継続により現在の親密な関係が構築された。

こうした関係を物語るひとつの事業が両国を結ぶ貿易路カラコルム・ハイウェイの建設である。1950年代後半に両国双方の労働者を導入する形で建設がはじまり、1978年に労働者の多大な犠牲の上に完成した。その建設途中に国境協定（1962 年）および貿易関連の二国間条約（1963年）が締結された。アボッターバード（ハイバル・パフトゥンフア州）からカシュガル（中国）までの全長1300キロメートルの道路である。ハイウェイとはいうものの、その多くは高地の細い崖路で形成されており、走行する車両は一部を除き、スピードを出すことは困難である。また、カラコルム山脈やヒマラヤ山脈沿いにあるため大雨や洪水等の自然災害が起きると、がけ崩れが生じやすい。そのために、一時的に通行止め（できるだけ短時間で、道路に落ちた岩等を取り除く作業が行われる）になることも多い。中国製品をパキスタン市場に搬送する際の主要道路ではあるが、通行止めになると貿易に影響が出ることもある。



（本科研調査とは関係なく、筆者が 2016 年 4 月にカラコルム・ハイウェイを訪ねた際に見かけた光景）

中国とパキスタンの経済関係は、2006 年締結の自由貿易協定の下で以前に増して強くなっていたが（中国企業がパキスタンで製造することを奨励し、パキスタン人の雇用の増加が期待された）、2013年に中国の一帯一路構想の一環として両国間でCPECの覚書が交わされたことで、それは揺るぎない確固たるものへと発展した。CPEC の下で、中国は 2014 年か

ら30年にかけて対パキスタン経済協力を実施することになり、現在進行形である。具体的には、電力不足で悩むパキスタンのエネルギー問題を解決するために、パキスタン各地でダムや水力・風力発電所の建設がなされているほか（エネルギー分野が最も大きなプロジェクトである）、貿易路を確保するための道路建設や既存の道路の補修作業、病院等の各種のインフラ整備が行われている。中国にとって道路建設や補修およびグワーダル港建設援助は、中東の湾岸諸国や欧州、アフリカへの貿易路を確保する上で必須であり、港の建設援助のみならずその租借権を確保することが極めて重要な課題であった。なお、グワーダル港は2016年から開港している。

現地調査中、事故が多いカラコルム・ハイウェイ上で、中国企業による道路舗装工事等が中国人技術者とパキスタン人労働者により進められているのを各所で目にした。CPEC関連プロジェクトに従事する中国人（技術者や熟練労働者）の安全確保はパキスタン軍が担っているため、その工事現場に中国人がいるか否かは同軍の存在によりすぐにわかる。

3. 現地調査報告

3-1 パキスタンに駐在する中国人の増加

筆者は2012年からアフガン難民支援活動のために毎年のようにパキスタンを訪問してきたが、2014年以降は空港や街中で中国人の姿を頻繁に目にするようになった。また、道端でパキスタン人から「你好」と挨拶されることが多くなった。同時に各地でCPECを祝う看板等を見かけるようになった。

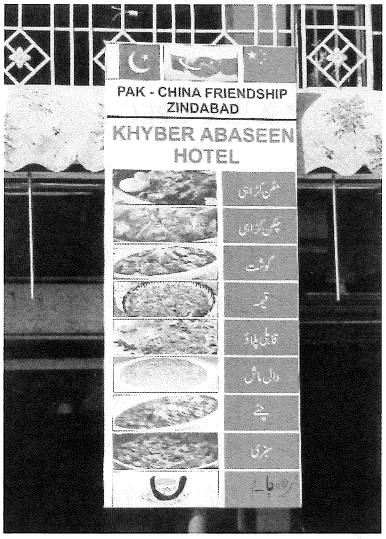
第二次現地調査中に聞き取りに応じてくれた中国人男性コンサルタントによると、パキスタンは中国人の投資家の間で最も人気がある投資先になっている。また、1,000社以上の中国企業（主には建設業と貿易業）がパキスタンに事務所を開設しており、10万を超す中国人がパキスタンに駐在しているとのことであった。また、今後は駐在員の数がさらに増えることが予測される。

駐在する中国人はパキスタンに投資する企業関係者（コンサルタントや事務員を含む）や技術者、中国企業の工事現場で働く熟練労働者に加え、これらの駐在員のための料理人、高まる中国語学習熱に応えて孔子学院等の語学学校で中国語を教える語学教員等、多岐にわたる。ただし、基本的には単身赴任者が多く、家族とともに駐在している者は少ない。前述の男性コンサルタントによると、中国企業は英語を少し理解できること、また（海外での）新しい生活になじみやすいことを理由に、年齢的に若い技術者をパキスタンに派遣する傾向が強いという。また、第一次現地調査で聞き取りに応じてくれた中国人男性企業経営者（中国の大企業の下請け企業として、約100人のパキスタン人と約20人の中国人を雇用）によると、駐在員は圧倒的に男性が多く、女性の駐在員（割合的には男性駐在員の約10分の1）の多くは事務職に就いているとのことであった。また、投資や進出に影響を与えかねない治安問題に関しては、治安問題はあるが、ビジネスの機会が多いため、危険をおかしてでもパキスタンに進出する中国人が多いとの指摘があった。

以下では、第一次現地調査と第二次現地調査の結果を筆者が撮影した写真を示しながら報告する。これらの写真を通して、パキスタンにおける中国の一帯一路構想の影響（経済面のみならず、そこから付随して出てきた各種の影響を含む）をみることができよう。なお、ここで示す各データは現地調査時のものである。

3-2　各所に見られる CPEC を祝うポスターや看板

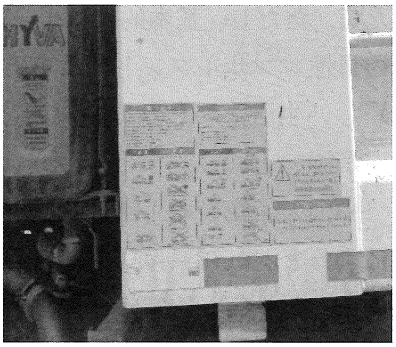
イスラマバードの中心部にある現地の銀行（Soneri Bank）の支店の窓には、CPEC の成功を求めるポスターが貼られていた。中国語とウルドゥー語および英語の 3 か国語が用いられている。真ん中の白いポスターには、「我々は異なる言語を話すが、成功を求める声は一つ」と書かれている。中国人が用いる箸もデザインの絵柄として用いられている（右端の赤いポスター）。



カラコルム・ハイウェイ上にあるキャラバン・サライ（隊商宿）のひとつに掲げられていた看板には、レストランで提供しているメニューの上に、パキスタンと中国の国旗（両端）と両者が手を結ぶ様子が絵として示され、その下には「パキスタン・中国と友好関係、万歳」と書かれていた。

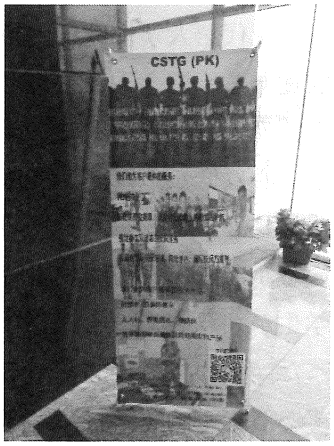
このキャラバン・サライの庭には、中国の建設会社「中国交通建設股份有限公司」（中国交建）のトラック（同社の白色と青色のロゴ付き）が止まっていた。当然ながら、トラックに貼られている注意事項も中国語と英語で表記されている。

カラコルム・ハイウェイ上やその周辺地域では、中国企業が担う多数の CPEC 関連プロジェクトが多数進行中であるため、こうした中国企業のトラックは随所で走行している。なお、中国公建の大きな事務所がカラコルム・ハイウェイ上に開設されている（後述の通り）。



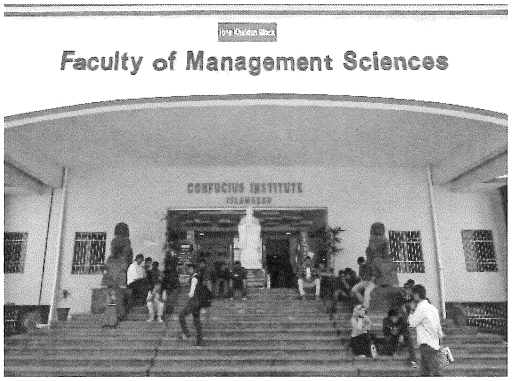
3-3 中国食品を販売するスーパー・マーケット

イスラマバード中心部には中国人駐在員の増加にともない、これらの人々を対象とするスーパー・マーケット「中华园」が開店している。販売物の多くは中国食品であったが、中国製の医薬品も陳列されていた。店員は中国人であり、レジの横には無料の中国語週刊新聞「華商報」が置かれていた。スーパー・マーケットの入り口の横には、中国人専用のセキュリティ会社「中国安保技术集团」(中国のセキュリティ会社)の大きな広告パネルがあった。訪ねた時間が多くの駐在員の就労時間中の昼間であったため、客はみかけなかったが、就労後に多数の中国人が買い物に来ていると思われる。

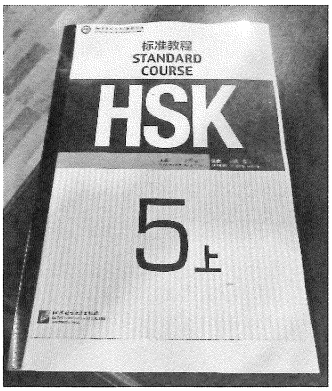


3-4　高まる中国語学習熱－孔子学院と中国語学科

イスラマバードの国立現代語大学内に開設されている孔子学院（同大学の経営学部棟に教室や事務室等がある）では、多数のパキスタン人（多くは若者）が中国語を学んでいる。聞き取りに応じてくれた学院長によると、これらの学生の多くは将来、①パキスタンの中国企業への就職、②中国企業での通訳、②中国での起業を考えている。ここで学んだ後に、中国の大学（例えば、北京大学、东北师范大学、上海外国语大学等。ビジネスの機会が多い広州の大学で学ぶ者もいる）に留学する者もいる。パキスタンと中国との経済的つながりゆえの学習熱である。なお、孔子学院はカラチ大学のなかにも開設されている。



各受講生は一日あたり 45 分授業を 2 コマ（計 90 分）受け、3 か月で 1 コースが終了する。コースは 3 コース開講されている。授業料は 1 コースあたり 5,000 ルピー（日本円で約 5000 円）である。教科書は汉语水平考试（HSK）の 6 級までのレベルのものを使用することになっているが、実際には 6 級レベルまで教えることはできていない。パ

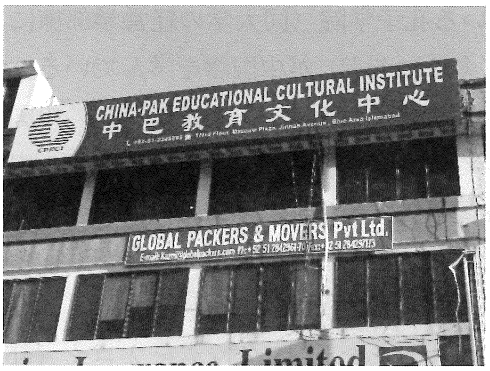


キスタン人にとって、漢字学習が非常に困難をともなうからである。

7人の教員が授業を担当しており、一様に年齢が若い。基本的にはイスラマバードで数年勤務をした後に中国に帰国する。パキスタンの安全面の問題から男性教員の方が多い。

訪問時に孔子学院内でパキスタン・中国国交65年記念展が中国大使館、孔子学院、国立現代語大学の主催で開催されていた。こうした催しからも、両国の緊密な関係をうかがうことができる。

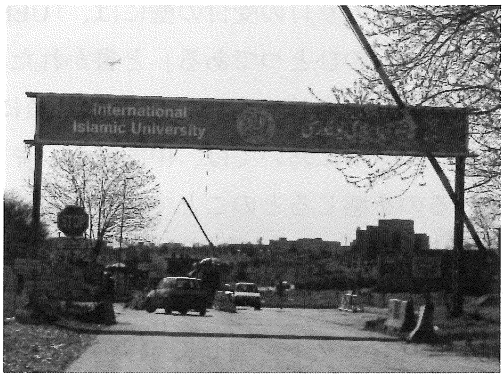
国立現代語大学には。1970年開設の中国語学科が別途ある。聞き取りに応じてくれた学科長によると、元々、パキスタンの学生たちは中国語に対する関心は低かったが、CPEC以後は就職面から急激に学生が増加したという。学生の間には「中国語を知っていると、良い就職先をみつけることができる」というイメージが広がっているからである。開設当時、登録学生数は10人未満であったが、現在では1,000人を超す学生が登録している（ちなみに日本語学科も開設されているが、受講生が34人しかいなかった。極めて対象的である）。これはパキスタンで伝統的に人気がある英語学科に次ぐ人気である。中国語学科には32人の教員が在籍しており、その内訳はパキスタン人と中国人が半分ずつとなっている。パキスタン人教員の全員が中国への留学歴を有している。学生は、一日あたり5コマ（1コマ1時間）を学んでいる。



イスラマバードには孔子学院や国立現代語大学以外の中国語学校（民間）が開設されている（写真はイスラマバードの中国語学校）。中国語学習熱の大きな高まりの証左であろう。カラチも同様である。

第二次現地調査中に宿泊先のチラスのホテルで中国人技術者のための通訳を務めているパキスタン人と話をする機会があった。元ドライバーであった彼は中国語を独学し、通訳になったとのことである。ただし、漢字が難しいことから、読み書きはできないとのことであった。

中国語学習熱の高まりとともに、パキスタンに留学する中国人留学生も増加している。1980 年 11 月に開校された国際イスラーム大学（International Islamic University）イスラマバード校は 35,000 人の学生が在籍する巨大な総合大学である。同大関係者によると、1,500 人から 2,000 人の中国人留学生（基本的に回族等のムスリム学生）が学んでいるという。管理が厳しい大学であるため調査は容易ではなかったが、校内で中国人留学生らしき若者が歩いている姿を目にし、話しかけてみると回族の学生であった。



3-5　中国企業の工事現場（1）道路工事

カラコルム・ハイウェイに向かう途中で、CPEC の重要プロジェクトのひとつである道路工事（モーターウェイの工事と思われる）の現場を訪問した。パキスタン人の労働者しか確認できなかったが、工事現場できいたところ、中国人技術者等も現場にいるとのことであった。

工事現場に設置されていた車間注意を促す看板は、英語と中国語とウルドゥー語の 3 言語で書かれていた。CPEC 関連の他の工事現場でも、中国人とパキスタン人の双方が理解できるように、看板等は基本的に 3 言語で表記されている。

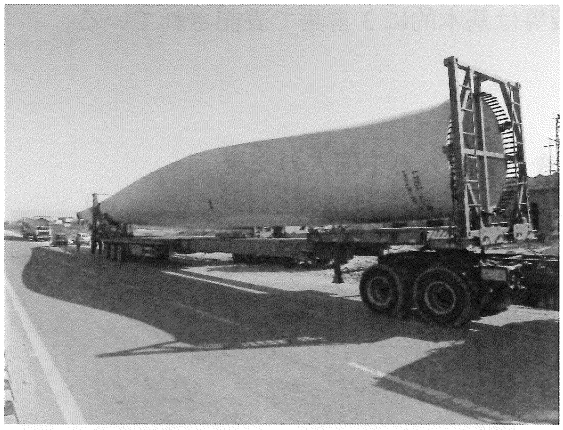
3-6　中国企業の子会社 UEP での聞き取り－パキスタン人と中国人の交流

United Energy Pakistan (UEP)は、カラチに本社があるパキスタンのエネルギー会社である。石油やガス、電力等を取り扱っている。被雇用者は全員パキスタン人であり、パキスタンに登記しているパキスタン人の会社ということになっているが、親会社は北京に本社がある中国のエネルギー会社の「联合能源」（United Energy Group/UEG）である。パキスタン法上、パキスタンで投資をする場合は、あらたにパキスタン人

所有の会社をつくることが条件のひとつとされているからである。両者ともロゴは同じである。会社入り口の受付の壁には、「UEP の風力発電プロジェクトは、CEP の 14 最優先プロジェクトのひとつである」と書かれたバナーが掲げられていた。

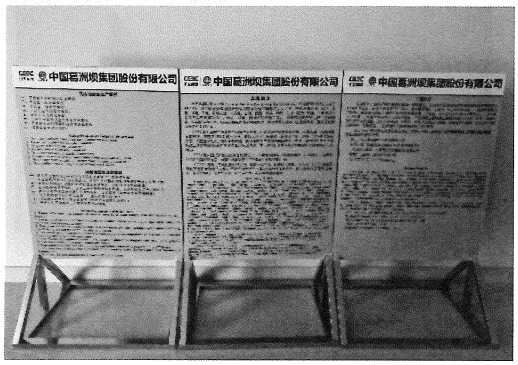
聞き取りに応じてくれた UEP の社員によると、少なくとも自分が担当している風力発電プロジェクトにおいては、中国人とパキスタン人の双方が CPEC を通して互いに学びあっているのを感じるとのことであった。また、パキスタン人は家族中心主義の傾向があり、中国人は仕事ベースで動く傾向があると思うが、そうした異なるメンタリティを今では互いに理解しようとしているのではないか、との意見も出された。実際にパキスタン人の被雇用者がプロジェクトを通して知り合った中国人技術者を結婚式に招待する姿がみられたり、逆に中国人側がムスリムのパキスタン人のラマダン時や金曜日のお祈りの時間を配慮するようになったりしているとのことであった。また、パキスタン人の中国語学習熱が高まっている一方、中国人の駐在員のなかにも滞在が長くなり、ウルドゥー語を学ぶ者たちが出ているとの指摘もあった。今後の関係に関しては、中国とパキスタンの歴史的な深い関係ゆえに、今後はさらにより深い関係を築くことができるのではないかとの期待が語られた。

なお、UEP が運用を請け負ってきた風力発電所は、シンド州のジムピールにある。風力発電の建設は 2012 年に始まり、2016 年に完了した。2017 年から発電所としての運用がはじまり、現在にいたっている。建設のピーク時には、300 人から 400 人ほどの中国人労働者（技術者や熟練労働者。多くは男性）が現場で働いていたという。建設現場ではパキスタンと中国の音楽を流す音楽祭等も行われ、双方の文化交流が図られた。また、労働者が使う台所はパキスタン人用と中国人用にわかれていたが、双方が料理をわけあう等の交流もなされていたとのことである。また問題となる豚肉であるが、そもそもパキスタンでは豚肉の入手が困難であり、また現地で購入する食材はハラルであるため、料理の交換でも問題は生じなかったそうである。



3-7　現場に派遣されている若い中国人の技術者の話

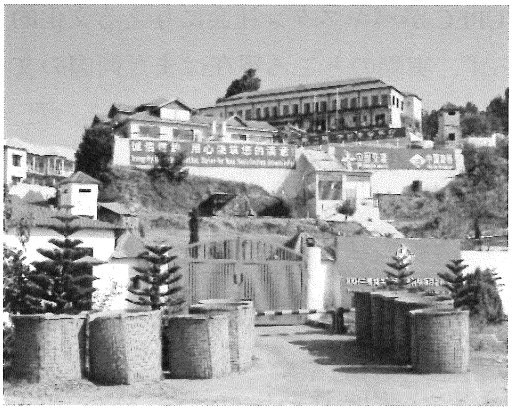
運用時期に入っているUEPの風力発電所には、訪問当時70人から80人の中国人労働者（技術者と熟練労働者）が駐在していた。湖北省にある「中国葛洲坝集団股份有限公司」（中国能建）から派遣された者である。ここでは、滞在が2年におよぶ中国人技術者3人（女性1人、男性2人。年齢は24歳、25歳、32歳）から話を伺うことができた。一人は既婚者であり、妻を中国に残して単身赴任をしている。事務所兼居住用に使われている建物には、中国人20人（この3人を含む）が住んでいるとのことであったが、見学時に目にした駐在員は一様に若かった。また、中国人の料理人も住んでいる。この建物の中には、中国葛洲坝集団股份有限公司の安全目標、同社の紹介、プロジェクトの概要を中国語と英語で示したボードが置かれていた。



3人の技術者によると、駐在員は電話やインターネット上のビデオチャット、微信等を使って家族と連絡を取り合っている。屋外は気温がとても高いため、休日や仕事後はバスケット等の球技をしたり、ジムを利用したりして時間を過ごすことも多い（食材を買うために、週3回、セキュリティ・ガード付きでカラチに行っている）。パキスタン料理はケバブ等がウイグル料理に似ているため、食べやすいと感じるとのことであった。ウルドゥー語は少しだけ話すことができるようにはなったが、パキスタン人とは基本的に英語で交流をしているとのことであった。

女性技術者によると、赴任前は家族が治安面で心配したが、自分はパキスタン人の対中感情が良いことを聞いていたため、家族ほどの不安を感じなかったという。快適に暮らしており、パキスタン人をフレンドリーと感じることも多く、またパキスタン人の友人ができたことからも離れがたい気持ちが湧いているとのことであった。

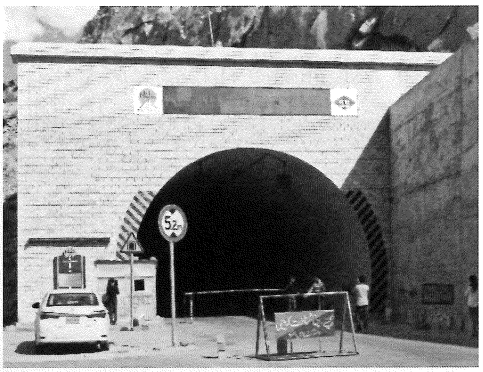
3-8　厳重なセキュリティ



カラコルム・ハイウェイ上に、「中国交通建設股份有限公司」（中国交建）の大きな事務所が開設されている。入口付近には、セキュリティ対策のために土嚢がたくさん置かれている。建物の壁には、「ともに一帯一路を構築しよう、パキスタン・中国間の友好万歳」等と書かれた青いバナーが貼られている。

撮影のためにカメラを構えたら、パキスタン人のセキュリティ・ガードが門から出てきて、厳しい顔で追い払われた。

3-9　パキスタン・中国友好トンネルーカラコルム・ハイウェイ上で



2015 年 9 月、カラコルム・ハイウェイの中国国境に近いアッタバード（ギルギット・バルティスターン州）で、中国からの支援を受けてパキスタン高速道路公社（National Highway Authority）が建設した 5 つのトンネル（パキスタン・中国友好トンネル）が開通した（写真は第 1 トンネル）。この付近では 2010 年の地滑りにより道路が損傷を受けたり、せき止められた川の水により湖ができたことで周辺の村が水没したりする等の大きな被害が生じた。その復興作業の一環としてトンネルや橋があらたに建設されることになったのである。先述のようにカラコラム・ハイウェイは、両国の貿易路として極めて重要なものであるため、その復興は CPEC の進行にとっても必要不可欠であった。

第 1 トンネルの近くの道路上の壁には両国の国旗とともに英語と中国語で「パキスタン・中国間の友好万歳」が大きく書かれていた。

4.　おわりに

二度にわたる現地調査を通して、パキスタンによる中国への経済依存の状況が明確になった。CPEC の研究をしているパキスタン人研究者によると、歴史的な政治・軍事上のつながりゆえに両国の関係は友好であり続けているが、CPEC がパキスタン社会に与える文化的インパクトについては研究上明らかにはなっておらず、実際のところ現在はまだ両国の文化的な違いを互いに理解していくための準備段階にあるのではないか、とのことであった。中国の子会社で働くパキスタン人社員は両者のつながりが現場では構築されてきているとポジティブに評価していたが、そうしたつながりが両社会の文化的側面にどれほどのインパクトを与えるものとなりうるかは、未知数である。

現地調査では、経済面での友好関係が突出して注目を浴びる一方で、中国とパキスタンの貿易のバランスがとれておらず、圧倒的に中国側の投資になっていることに危惧を示すパキスタン貿易商からも話を聞くことができた。ビジネスマン的感覚として、パキスタン市場が中国企業に支配されることを警戒しており、将来的に両者が相互関係を築くことができるか否かはわからないとのことであった。経済的に脆弱なパキスタンが中国への過度な経

済依存から抜け出す術を見いだせなければ、この貿易商が指摘するように、今後も両者が経済面でウィンウィンも近づくことは困難といえるのではないだろうか。

【参考文献】

- 井上あえか「パキスタンからみる対中国関係」『現代インド研究』第 3 号、2013 年、97-113 頁 https://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static_indas/wp-content/uploads/pdfs/CI3_06_inoue.pdf（2019 年 2 月 10 日最終閲覧）
- "China-Pakistan Economic Corridor: Lines of Development – not Lines of Divide", *The Express Tribune*, 17th March 2015, https://tribune.com.pk/story/887949/china-pakistan-economic-corridor-lines-of-development-not-lines-of-devide/（2019 年 2 月 11 日最終閲覧）
- 栗田真広「中国・インド関係における『パキスタン問題』」『NIDS コメンタリー』48 号、2015 年、1-5 頁、http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary048.pdf（2019 年 2 月 10 日最終閲覧）
- "M Nawaz inaugurates Pak-China Friendship Tunnels over Attabad Lake", *Dawn*, 14th September 2015, https://www.dawn.com/news/1206911（2019 年 2 月 10 日最終閲覧）
- 小田尚也「『一帯一路』構想と強まるパキスタンの中国への依存」『アジ研ポリシー・ブリーフ』No.114、2018 年、1-2 頁、https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Download/PolicyBrief/Ajiken/pdf/114.pdf（2019 年 2 月 10 日最終閲覧）
- 中国安保技术集团、http://www.cstghk.com/（2019 年 2 月 12 日最終閲覧）
- 中国交通建設股份有限公司、http://www.cccltd.cn/（2019 年 2 月 12 日最終閲覧）
- International Islamic University, Islamabad, https://iiu.edu.pk/default.htm （2019 年 2 月 12 日最終閲覧）
- "UEP Wind Farm (Jhimpir, Thakka)", China Pakistan Economic Corridor, http://cpec.gov.pk/project-details/12（2019 年 2 月 12 日最終閲覧）
- United Energy Group(UEG), http://www.uegl.com.hk/en/index（2019 年 2 月 12 日最終閲覧）
- United Energy Pakistan (UEP), http://uep.com.pk/（2019 年 2 月 12 日最終閲覧）